

書評

「石材の事典」

鈴木淑夫 (2009)

朝倉書店, 379p.

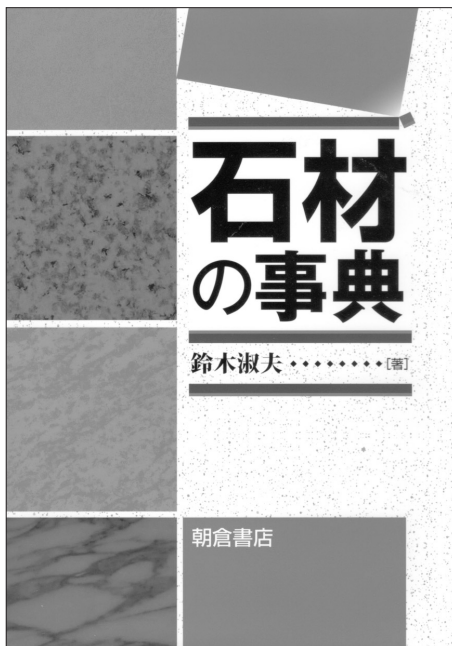
岩石は、地殻-地球を構成する天然物質として地質学-岩石学の研究対象になるだけでなく、様々に加工された石材として私たちの日常生活に不可欠な天然素材ともなっています。従って、著者が言うように「石材関係の語彙の中には石材の採掘、加工、建築物の施工など建築用の語彙が少なからず含まれている」。しかし「学問的な面と応用的な石材の採掘や加工などを総合的に取り扱っている書物は意外と少ないようなので、不十分であるが岩石と建築を繋ぐことも必要と考え」、本書をつくることとしたと述べています。

蛇足ですが、筆者もかつて「石の俗称事典」(加藤・遠藤, 1999)を上梓しましたが、世間一般で「石」「岩」「鉱物」「岩石」「石材」などの区別があいまいなことに驚かされたものです。一方、石材の名前は、岩石の組織・色・産地のみならず歴史や故事も踏まえた多彩な表現があり、その由来を知ることもより理解を深め親しみをわかすものです。

本書の構成は、次の通りです。

I 「概説」で、建築石材・同じ地域で異なる石材・日本の建築物・日本産の石材・輸入石材及び凡例について簡潔に紹介しています。続くII・III章が本書の中核をなす部分です。

II 「関連用語-工具、工法、構造物、原料、素材などに関する語」は、地質学関連の類書に見られない用語集となっています。「花崗岩」といった基本的な岩石名も出てきますが、私たちにふだん馴染みの少ない石材に関わる用語、例えば「三遍小叩き」とか「蹴込み」とか、「僧都」ほかの石を利用した道具・装置といった、ちょっと名前をみただけではどんなものかまったく検討もつかない面白い用語が出てきてあきさせません。また、石材そのものではありませんが、「節理」「断層」といった構造地質学用語、各種の「強度」などの岩石物性用語、さらには「重力水」といった広義の関連用語も登場し、読み物としても興味深いものです。



III 「石材」は、「国産石材」と「外国産石材」に2大別され、前者は北から都道府県別に様々な石材名称、それこそ「みかげ」だけでも10数種類も紹介されており、後者でも我が国に近年増えた輸入石材について国別(33カ国)に記述されています。また、そのうち特に代表的な石材16種がカラー口絵で掲載されています。

是非プロアマ問わず、少しでも「石」に興味を持つ方々に座右の一書とすることをお勧めする次第です。

なお、本書の著者は、本文及び序文の原稿を執筆された後、2008年8月に永眠されました。その後石原舜三(元地質調査所長・工業技術院長)氏のご協力で本著作が世に出ることとなったことを付記し、ご冥福を祈ると共に、関係者のご努力を多とするものです。

(産総研フェロー 加藤碩一)